

# 豊明希望チャペル礼拝

2026/6/7

「御言葉の重さ」

使徒 13 : 44～52

使徒パウロの最初の宣教地になった、キプロス島から、小アジア(トルコ地方)の出来事について教えられています。

キプロス島でも、福音は好意を持って受け入れられ、多くのクリスチャンが生まれましたが、このトルコのピシディアのアンテオケと呼ばれる、ユダヤ教の会堂での福音宣教は、大きな反響を呼び、来週も同じ話をして欲しいと頼まれ、ピシディアの人たちは、家族親族一同を連れて、というより、：44「ほぼ町中の人々が、主のことばを聞くために集まってきた・・・」と言うのです。今日は、その翌週の安息日、前以上に集まってきた人たちへのパウロのメッセージの箇所となります。まずは、今も言いました 44 節にある、ルカの報告の言葉から、あらためて読みましょう。

**「13:44 次の安息日には、ほぼ町中の人々が、主のことばを聞くために集まって来た。」**

前回も確認したのですが、ルカは、この素晴らしい人々の反応の記録を、こういう言い方で記録しているところを、今一度確認したいと思います。

何よりも注目したいのは、「**主のことばを聞くために集まってきた**」と、この箇所です。

ここで起きていることにしたがって言えば、パウロが語った聖書解釈に興味を持って集まってきたということです。あるいは、パウロの説教を聞きに来たという言い方になるはずであります。しかし、ルカは、そこをあえて、「主のことば」主とは、神のこと、ですから、神の言葉、あるいは御言葉を聞くために来たという言い方を丁寧に行っていると言うことであります。

強調して言えば、パウロが語ったことが人々の心に響いたのではない、パウロが語った神の言葉が彼らの心に響いたのだと言っていると言うことです。まるで、聖書の言葉が、生物的に生きていて、その言葉が、人々の心に、胸の皮を破って、侵入して、直接、心臓に影響を与えるように、パウロではない、御言葉に力があつた、それを改めて聞くために集まったと言っていると言うことです。

これは、強調のし過ぎではありません。ルカは、この言い方を繰り返しています。すなわち。

**「13:44 次の安息日には、ほぼ町中の人々が、主のことばを聞くために集まって来た。」**

**「13:46** そこで、パウロとバルナバは大胆に語った。「**神のことば**は、まずあなたがたに語られなければなりませんでした・・・」

**「13:48** 異邦人たちはこれを聞いて喜び、**主のことば**を賛美した。そして、永

遠のいのちにあずかるように定められていた人たちはみな、信仰に入った。」

「13:49 こうして**主のことば**は、この地方全体に広まった。」

賛美したのは、もちろんパウロのメッセージでもなければ、ここは強調のしすぎかも知れませんが、主でもなく主のことばだとも言うように 48 節では強調しています。また、パウロ自身も、伝えているのは、主のことば、神の言葉であると言うのです。

そして、その結果、キリスト教が広がったのでもなく、教会の勢力が増したのでも、教会が増えたのでもないし、信者が増えたのでもなく、主のことばが広まったというのです。もちろん、具体的には、信者数が、増したのです。しかし、ルカは、あえてそこじゃないと言います。勢力を増したのは、神の言葉の力によるのであり、神の言葉なのだと。ここが、今日、おそらく一番、私たちが心に留めて、帰らねばならない、今日の箇所を中心点だろうと思います。

そんなことを思いながら、44 節から、49 節までを、あらためて読みます。

「13:44 次の安息日には、**ほぼ町中の人々が、主のことばを聞くために集まって来た**。13:45 しかし、この群衆を見たユダヤ人たちはねたみに燃え、パウロが語ることに反対し、口汚くののした。13:46 そこで、パウロとバルナバは大胆に語った。「**神のことばは、まずあなたがたに語られなければなりません**でした。しかし、あなたがたはそれを拒んで、自分自身を永遠のいのちにふさわしくない者にしています。ですから、見なさい、私たちはこれから異邦人たちの方向に向かいます。13:47 主が私たちに、こう命じておられるからです。『わたしはあなたを異邦人の光とし、地の果てにまで救いをもたらす者とする。』」13:48 異邦人たちはこれ聞いて喜び、**主のことばを賛美した**。そして、永遠のいのちにあずかるように定められていた人たちはみな、信仰に入った。13:49 こうして**主のことば**は、この地方全体に広まった。」

少しウィクリフ聖書翻訳協会の、鳥羽季義（すえよし）先生について触れさせて下さい。鳥羽先生は、インドの北にあるネパールの奥地の高山で、数十年にも渡って、0 から聖書翻訳を進め、現地カリン語の旧新約聖書を完成させた、ウィクリフの宣教師です(同じくウィクリフの働きをされていた O 兄弟はご存じと思います・・・)。



鳥羽先生は、私と同郷の長野県(安曇野市)の生まれで、SBC(信越放送)で、地元の有名人として、10 年ほど前に紹介されたことがあります。

SBC ラジオのインタビュー(2017 年 10 月 25 日放送)「たった一人で辞書を作った？ ネパールから、すごい人が帰ってきたらしい。その方の名前は、鳥羽 季義(すえよし) さん。」という紹介です。有名人と言うより長野県の英雄的？な扱いです。こう紹介されます。

「現在はドイツ人の奥様と二人で、池田町に住んでいます。鳥羽さんは、安曇野市生まれ。大学で言語学を専

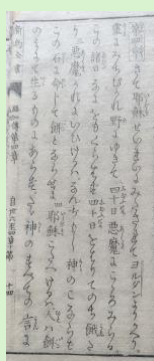


攻、さらに学びを深めるためにアメリカの大学へ留学。独特の言語を持つネパールに興味を持ち、言語学者としてネパールの言語を研究するために現地へ渡ったんです。「ネパールという国は、北海道の2倍ぐらいの面積ですが、その60もの言語があるんです。ネパール語という共通の言語がありますが、ネパール語を話す人々は全体の48パーセントにすぎません。標高差も80メートルから8848メートル。山の尾根ごとに村がある、という地域ですから、村と村を行き来することはかなり難しい。交流はほとんどなく、村独自の言語が発達していった。だから、60の言語は一つ一つ全く違うんです。」その村の人にしか通じない言葉を話し、文字もない、という世界に飛び込んでいった鳥羽さん。まずどうやってコミュニケーションをとったんでしょうか。「かつて、アイヌの村に入った金田一京介という東京大学の言語学者は、アイヌの人たちの前で画用紙にぐちゃぐちゃっとでたらめな絵を書いてみた。そうすると人々は、へマタ へマタ って言ってきた。それで、へマタとはこれはなあに？って言っているのだとわかるんです。そこから言語を一つ一つ丁寧に分析してくんです。」と説明されました。」

微妙にキリスト教を避けていますが、聖書の翻訳のために、どれほど苦勞されたか、そこにある献身ということも含めて、よく紹介して下さったと思っております。



先生は、2年前の2024年に天に召されました。そんな先生に24年前に、教会に来ていただいて、宣教報告をしていただいた事があります。44年かけた聖書翻訳の働きを、2012年に旧新約聖書を完成させ、終える佳境に入ったころだと思います。その際、教会のある姉妹が、聖書の出版としては、最初の、まだ、木版印刷の時代、ルカの福音書、ヨハネの福音書などと、新約聖書を少しずつ出版していた、その頃の貴重な聖書を寄贈して下さっていることをお話しして、先生が、非常の興味を持たれて、少しやりとりをしたことがあります。その際、先生との間で、私が、聖書で、

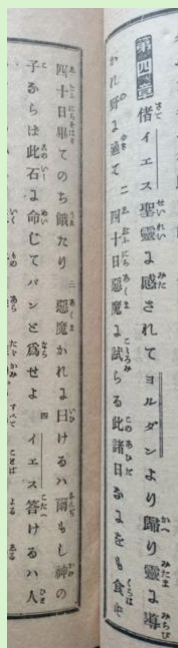


イエス様が「私はいのちのパンである」という聖書の箇所、この「パン」が、餅となっていて、餅という漢字に、パンとカタカナでルビが打ってあるんですね、明治の初め、パンを見たことのない日本人に、イエス様が命のパンだと伝えるのに、餅と書いて、パンとルビを振った、聖書を伝える、そんな聖書翻訳者たちの苦勞があつて、今の私たちがいるのですよねという・・・(←ルカ伝4:4『明治9年版』)そんな話しをしていて、そのコピーを欲しいという事になってから、送った？記憶があるのです。そんなやりとりがあつて、いよいよ最後の仕上げに、ネパールに帰られると言う事になって、Faxで、このように送られてきました。



「林先生。来月、ネパールへまた旅立ちます。先生も、東京聖書展に行かれたと思いますが、いかがでしたか。聖書展で、翻訳についての講演をしてきました。あまりゆっくりとは見ていられなかったのですが・・・死海写本の部分をゆっくり読みました。2000年

前の手書きの断片に感動を覚えたほどです。こんな長く残っていたこと自体奇跡と言わざるを得ません。・・あんな小さな文字を書くのは大変でしたでしょう。」



ちなみに、そのルカの福音書の木版の聖書(A 姉が教会に寄贈して下さったものとは、違う後日、私が個人的に手に入れた物)の、その餅の箇所がこれです。そして、これが、明治 14 年版ですが、明治 9 年から 5 年経って、木版から活版になっていますが、そこには、もう、パンが明治の時代に流通してきたのでしょうか。餅が消されています。

そして、2012 年には、このように聖書が完成しました。半生を、いや、人生すべてを言っているほど、すべてを費やしたのは、ただ、聖書が神の言葉であって、それを伝えなければならないという祈り、あるいは、御言葉の力といった方がいい、御言葉の力に支えられ、それを命がけて伝えられた、それは、まさに、ルカの思いであり、パウロの思いであったことを思うのです。

だから、パウロでもなく、バルナバでもなく、伝えたのは、神御自身の力であり、御言葉そのものの力であるという事であります。

先生は、その Fax の余白に、こう書いてくれました。「天地はすたるべし、しかれども、わが言葉はすたるべからず。(ルカ 21:33)」と。



先生も、この木版の時代の聖書を探しておられて、当時、その聖書の一冊の分冊が、何十万円で売られているという話しになって(今は、たまにネットの古本屋さんに出ることがあって、誰も買い手がなくて、私と何人かが買っている状態・・)、私は、当時、手もとにあった、その聖書を見ながら、いいものを持たれていますねと言う以上に、叱責にも似た「林先生。あなたは、神の言葉を大事にしていますか？その価値をご存じですか？くれぐれも、神の言葉を大切にしてください。それは一生命をかけるに値する宝物

です。」とされているように感じたのです。

今日の箇所。この御言葉が伝えられた時、一方では、人生を変える言葉として受け入れられたと同時に、それを語らせまいと、相当の抵抗があったことを、伝えて、ルカは、この記事を終えます。

「13:50 ところが、ユダヤ人たちは、神を敬う貴婦人たちや町のおもだった人たちを扇動して、パウロとバルナバを迫害させ、二人をその地方から追い出した。

**13:51 二人は彼らに対して足のちりを払い落として、イコニオンに行った。13:52 弟子たちは喜びと聖霊に満たされていた。」と。**

ちなみに、抗議の印に、足のちりを払うように、その場をいったんは離れますが、また、再びパウロは、この地に戻って、宣教を続けますが、ルカの想いの中には、人は去ったが、あるいは、人は追い出されたが、聖霊の働きは残った、御言葉は生きているとでも言うように、「**13:52 弟子たちは喜びと聖霊に満たされていた。**」と、その弟子達は、必ずしも伝えたパウロ達だけではなく、伝えられた、当時、クリスチャンはすべて弟子と言われていた、その時代、アンテオケの教会に、クリスチャンたちすべてに、御言葉は残り、聖霊の働きは止まなかったと、報告しているように思うのです。

さて、今日は、ピシディアのアンテオケでの報告を見ました。その中心点は、御言葉の力は素晴らしい。御言葉こそが、喜びと聖霊に満たされる根拠であることの報告であったように思います。

今週の歩み。御言葉。御言葉従って、永遠の命を与えられた者の歩みを。御言葉を大切にし、御言葉に従う歩みをここからはじめさせていただきます。